



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本語と英語、再発見：「人間言語」という視点
Author(s)	奥, 聡
Citation	The Northern Review, 39, 5-29
Issue Date	2019-11-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/76177
Type	other
File Information	NR39_2_oku.pdf



日本語と英語、再発見

—「人間言語」という視点¹

奥 聡 (Satoshi Oku)
satoshio@imc.hokudai.ac.jp

1. はじめに

外国語を学習する際に、誰もがその学習言語と自分の母語との違いに気がつくでしょう。そして、そのような違いを乗り越えようとするのが外国語学習の1つの醍醐味であると思います。しかし、同時に母語と異なる外国語の特徴を理解し、身に付けることは決して簡単なことではなく、多くの外国語学習者にとって大きな壁ともなります。

一方、1950年代中ごろから始まった、新しいタイプの理論言語学では、言語間の表面的な違いの背後にある共通の特徴が大きな興味の対象になっています。それは人間が生まれながらにして持っている頭の中にあることばを操る仕組みそのものを明らかにしたいという大きな目標を持った研究分野だからです。本稿では、英語母語話者と日本語母語話者の頭の中にあることばを操る仕組みを具体例として、それらが、ある面では非常に似ている、あるいはほぼ同じである、ということを論じたいと思います。第2節からの具体的な議論に入る前に、大切な概念の区別を1つ紹介します。

どの研究分野にも共通することですが、ある基本的な用語や概念に関して、それをどのようなものであると考えるか、定義や解釈、あるいは研究者の「立ち位置」によって、その実体が大きく異なることがあります。「言語」あるいは「言語能力」という概念も同様です。「言語」とはいったい何を指す表現として使われるのか。人によって、あるいは状況によってもさまざまに異なってくるでしょう。もっとも一般的なイメージとしては、「日本語」「英語」「中国語」など名前のついたものであり、たとえば「日

1 本稿は、2014年9月4日北海道大学/WREAC Tandem Language Learning Program(北海道大学スタディ・ウィーク)での講演内容に加筆修正を施したものです。講演に参加し、貴重な質問・コメントを下された皆さまに、そして、本講演を含むスタディ・ウィークを準備くださった関係者の皆さま、特に司会を担当してくださった宮下雅年先生に、感謝いたします。なお、本稿は、国際広報メディア研究科立ち上げ当初から言語系教員チームのメンバーとして献身的に貢献してくださり、2018年10月19日にご逝去された高見敏子先生に捧げたいと思います。本稿に何か思わぬ不備があれば、その責任は全て筆者に属するものです。

本語」とはそれを母語とする人たちが、話したり書いたりすることによって現れてくるもの（音として聞こえるもの、文字として読めるもの）のことで理解されるかもしれませんが。しかし、「言語」という概念にはそのような一般的なイメージとは異なるものを表すこともあります。事故や病気で脳の機能の一部が失われ、いわゆる「失語症」になる人がいます。そのような症例に対して、「言語を失っている」「言語能力が損傷している」という言い方することがあります。² この場合の「言語」や「言語能力」は、口から出てくる言語表現のことではなく、言語表現を生み出したり、あるいは理解したりする頭の中の潜在的な「能力」あるいは「機能」のことを指しているでしょう。1950年代半ばから始まった理論言語学における研究対象は、まさにこのような意味での頭の中にある認知機能の1つとしての「言語」「言語能力」であり、しばしば「I言語」と呼ばれます。一方、表に出てきた、耳で聞いたり目で見たりすることができる言語表現は、「E言語」として、両者を明確に区別します。³ この区別は大変重要で、近代物理学の世界で、実際に起こる「個々の具体的な物理現象」とその背後にある「普遍的な物理法則・原理」とを明確に区別することが重要であることと同じです。

「E言語」はそれを生み出したり理解したりする頭の中の「I言語」を解明していく上での重要なデータ、情報源の1つとなります。頭の中を直接のぞいてみても「言語能力」を直接見ることはできません。したがって、「I言語」によって生み出される、直接見たり聞いたりすることができる「E言語」を手がかりに「I言語」の正体を明らかにしていこうということになります。つまり、「E言語」は研究を進めていく上での重要な情報源の1つではありますが、「E言語」そのものが明らかにしたい本当の研究対象ではないのです。これはちょうど、たとえば宇宙物理学者が太陽の内部で何が起きているかを研究する際に、地球上から直接観察できる太陽から発せられている様々なデータを利用することと同じです。地球から確認できる太陽の表面のデータの分析そのものが最終的な目的ではなく、それを利用して太陽の中でいったい何が起きているかを明らかにするのが究極の目標となるわけです。同じように、頭の中で実際に何が起きているか（I言語）を直接観察することはできませんが、E言語を利用して頭の中の言語機能を研究することは可能なのです。

「E言語」のレベルで見ていると、人間の言語は一見無制限に見えるほど多種多様です。ところが、「I言語」のレベルで丁寧に見ていくと、人間の言語はどれも非常によく似ていること、あるいは全く同じ原理や規則に従っていることが分かってきま

2 このような「失語症」の例を用いて、理論言語学の分野でいう「言語」「言語能力」という概念を説明する方法は、John Whitman 氏（国立国語研究所・コーネル大学）から教えてもらいました。

3 I は intensional/internal/individual の I。E は externalized の E。（Chomsky 1986）

す。⁴ 本稿では、日本語と英語という、歴史的にも系統的なつながりがなく、言語類型論的にも大きく異なっていると考えられる2つの言語を具体例として、その驚くべき共通性を示してみたいと思います。以下、第2節では複合語の作り方を例に、第3節では発音の規則を取り上げ、両言語話者の共通性を論じます。第4節は文を組み立てる仕組みを、そして第5節では意味と語用をつかさどる仕組みを考えます。第6節はまとめとして、言語に対する生物学的視点を持つことの意味を考えてみます。

2. 複合語の作り方

現在の理論言語学の標準的な考え方の1つとして、人間の頭の中の言語能力はいくつかの部門に分かれていて、それぞれ独立の機能を果たし、相互に連絡を取り合いながら全体としての言語能力になっていると仮定されています。このような下位部門のことを「モジュール」と呼びます。そのようなモジュールの1つとして、まず、辞書 (mental lexicon) が挙げられます (以下、「レキシコン」と呼ぶことにします)。⁵ この頭の中のレキシコンは、普通の辞書と同様に、個々の単語や形態素に関して、どのように発音されるか、どのような意味を持つか、どのような文法的な振る舞いをするか、といったそれぞれの要素に固有の情報が蓄えられています。同じ言語共同体の構成員でも1人ひとりが知っている単語の種類や量には違いがありますから、個々人のレキシコンも少しずつ異なっています。しかし、同じ言語共同体の構成員であれば、意思疎通にあまり困らない程度にはレキシコンの内容も共通しているといえるでしょう。

さて、人間が持つ頭の中の辞書・レキシコンには、紙の辞書や電子辞書などとは大きく異なる特徴があります。それは、常に新しい単語を作り出したり理解したりする仕組みを備えているということです。そしてこのような仕組みには、日本語母語話者が持っているレキシコンと英語母語話者がもっているレキシコンとで多くの共通点が見られるのです。以下、この節では名詞の複合語を作り出す仕組みに注目して、英語話者と日本語話者との共通点を見てみたいと思います。

2.1 創造性と主要部後置

日本語母語話者も英語母語話者も、たとえば (1) のように、すでに存在している単語を2つ組み合わせることで新しい複合語を作ることができます。あるいは、複合語を構成している個々の単語を知っていれば、その複合語を初めて聞いたとしても、おおよ

4 この考え方を分かりやすく論じたものとしては、Baker (2001), Chomsky (1986, 2007), 福井 (2012), Pinker (1995), 上田 (2004) などが参考になります。

5 個々の単語を用いて文や句を組み立ててゆく頭の中の仕組み (統語規則 syntax) と頭の中のレキシコンとを分けて考えることは、Chomsky (1965) 以来、重要な区別であると考えられています。

その意味を推測し理解することができます。⁶

- (1) a. 携帯 + 電話 mobile + phone
 b. タンデム + 学習 tandem + learning

おそらく 1980 年代以前の日本語母語話者の脳内レキシコンには、「携帯電話」という複合語は存在しなかったでしょう。あるいは「タンデム学習」という複合語は、それをレキシコンに持っていない人も少なくないかもしれませんが、教われればすぐに理解して、使えるようになるでしょう。英語の mobile phone や tandem learning という複合語に関しても事情は同じでしょう。つまり、日本語母語話者も英語母語話者も、必要に応じて既存の単語を組み合わせる新しい複合語を作ることができる、理解することができる、という点で同じ言語能力を備えていると言えます。個々の単語の意味を知っていれば、それらからなる新しい複合語を初めて聞いても、多くの場合、瞬時にその意味を理解することができます。たとえば、「ワニバナナ」という複合語。⁷ 以前に聞いたことがなくても「ワニ用のバナナ」あるいは「ワニの形をしたバナナ」など「バナナの種類」だろうとすぐに理解できます。その意味で、人間の頭の中のレキシコンは大変創造的であるといえるのです。

さて、日本語と英語の複合語にはさらに大きな共通点が 2 つあります。その 1 つ目を以下で、2 つ目を第 2.2 節で紹介します。たとえば、「電話」と「携帯」という既存の単語を組み合わせる場合、その順序がとても重要となります。「携帯電話」という順序であれば、それは「電話」の一種であると理解できますが、「電話携帯」という順序では、「電話」の一種であると理解することはとても難しいでしょう。「タンデム学習」と聞けばそれは「学習（方法）」の一種であるとすぐに分かりますが、「学習タンデム」と言われると「学習（方法）」の一種と解釈するのは難しくなります。これは、文脈をいくら整えてもうまくいきません。次の例を見てみましょう。

- (2) 連絡がつかなかったけど、どうしたのですか？
 a. 携帯電話をなくしてしまったのです
 b. 電話携帯をなくしてしまったのです

(2) の例では、なくしたのは「電話」であることは、文脈からも一般常識からも明ら

6 新しい複合語が、その言語コミュニティにおいて多くの人に共有され定着し、長く使われるようになるかどうかは、さまざまな社会的な要因が複雑に関わってくる問題であり、本稿では扱いません。母語話者として 1 人ひとり個人のレベルで、新しい複合語を作ったり理解したりする能力が備わっているということがここでのポイントです。

7 この例は、大津（2004）にあります。

かです。それにもかかわらず、(2b)の「電話携帯」を電話の一種と理解することは相当難しいでしょう。つまり、複合語の語順が担っている意味解釈上の情報は、発話場面の文脈情報や一般常識よりも、強力であるといえます。英語の複合語の場合も事情は同じです。つまり、複合語に関して、日本語話者の頭の中にも英語話者の頭の中にも、(3)のような強力な規則が存在すると仮定することができます。

(3) 主要部末端規則

XとYからなる複合語 [X Y] の主要部はYでありXではない（つまり、複合語全体の特性はYが決める）

日本語母語話者の脳内レキシコンも英語母語話者の脳内レキシコンも、既存の単語を利用して必要な複合語を作るという柔軟な創造性を持っている一方で、主要部末端規則という厳しい制限にも同時に従っています。この点において、日本語話者の頭の中の言語能力と英語話者の言語能力は、全く同じ仕組みを持っているということになります。

主要部末端規則に関して1つ注釈をします。たとえば、日本語と英語しか知らないと、複合語の主要部末端規則(3)は、あたりまえのこと、人間の言語であればどの言語でも当然のことになってしまうかもしれません。しかし、世界の言語には、複合語が「主要部先端」であるものもあります。つまり、[X Y]という複合語において、(その全体の性質を決める)主要部がYではなくXである言語もあるのです。⁸

(4)	タイ語	<u>thoorasap</u> muruuthuruu	[電話携帯]
	ベトナム語	<u>diên thoại</u> cầm tay	[電話手持ち]
	ヘブライ語	<u>telefon</u> -selurari	
	フランス語	<u>telephone</u> portable	
	ルーマニア語	<u>telefon</u> mobil	

これらの言語でも既存の単語から必要に応じて複合語を作り出す創造性を持っているという点は、英語や日本語と同じと考えられますから、複合語を主要部末端型とする規則を持つか、主要部先端型とする規則を持つかは、生まれた後の言語環境によって決まる言語能力の「可変部分」であると考えられます。⁹

8 この例は、窪園（2002）から採用しました。

9 日本語の複合語には、主要部末端型ではないパターンがあります。並列複合語（coordinative compound, dvandva）と呼ばれるもので、[X Y]がYの一種ではなく、[XとY]と解釈されるものです。

(i) 少年少女（boy-girl）‘boys and girls’（not ‘boyish girl’）

(ii) 新郎新婦（bridegroom-bride）‘bride and groom’

2.2 「単語らしさ」の秘訣¹⁰

日本語母語話者と英語母語話者の複合語に関する言語知識のもう1つの共通点は、複合語をひとまとまりの単語らしく発音するための方法にあります。まずは、日本語の例を見てみましょう。標準的な日本語では、「大学」という単語は単独で発音すると「だいがく」のように平板なイントネーションで発音されます。また、「北海道」という単語は「ほっかいどう」のように、「か」から「い」にかけてピッチが下がります。ところが、この2つを組み合わせると複合語にすると、単独で発音されていた時のイントネーションとは異なり、(5)のように発音されます。

- (5) 北海道大学 ほっかいどうだ い がく

つまり、「ほっかいどう」の部分は平板イントネーションで発音され、「だいがく」の部分は、「だ」から「い」にかけてピッチが下がるように発音されます。もしこれをそれぞれの単語もとのイントネーションのままで読もうとすると、「ほっかいどうだいがく」となり、複合語としては大変不自然になるでしょう。これは「北海道大学」という複合語に特有のものではなく、多くの例に見られるパターンです。日本語の例をもう2つ見てみましょう。以下、(6)と(7)において(a)(b)はそれぞれが単独で発音された時のイントネーションで、(c)は複合語になった時のイントネーションです。¹¹

- (6) a. 携帯 けいたい
b. 電話 でんわ
c. 携帯電話 けいたいでんわ
- (7) a. 旅行 りょこう
b. 海外 かいがい
c. 海外旅行 かいがいりょこう

ここで観察できる共通点は、複合語の前半要素を「高いピッチ」で発音し、後半要素を「低いピッチ」で終えるというパターンです。

大変興味深いことに、英語においても、複合語は句とは異なるイントネーションパターンを示します。たとえば、mobile phoneは、通常の文脈ではMOBILE phoneのように前半要素を「強く」、後半要素を「弱く」発音します。中にはこの発音の違い

10 以下の議論は、窪蘭（2006）を参考にしています。

11 「北海道の大学」のような句 (phrase) の場合は、複合語と異なり「北海道」「大学」がそれぞれ単独で持っている本来のイントネーションパターンが保持されます。これは「携帯できる電話」や「海外への旅行」のような句の場合も同様です。イントネーションパターンの変化は複合語に特有の現象といえるでしょう。

によって句とは異なる意味を担う複合語もあります。

- | | 複合語 | 句 |
|--------|------------------------------|-----------------|
| (8) a. | green house GREEN house 温室 | GREEN HOUSE 緑の家 |
| b. | high chair HIGH chair 子供用高イス | HIGH CHAIR 高いイス |

green house は「強・強」と発音すると、句として解釈され「緑色の家」という意味になりますが、「強・弱」と発音すると、複合語として解釈され「温室」という意味になります。high chair の場合も同様のパターンで複合語としての意味と句としての意味を区別します。

さて、日本語は一般的に「ピッチアクセント言語」と呼ばれ、音の「高低」によってアクセントの区別をしていると考えられています。一方、英語は「ストレスアクセント言語」と呼ばれ、音の「強弱」によってアクセントの区別をしていると考えられています。¹² しかし、複合語の前半要素を後半要素よりも音声的に際立たせる（あるいは後半要素を音声的に弱く発音する）ことによって、その複合語をひとまとまりの「単語らしく」発音するという点は共通です。つまり、日本語母語話者も英語母語話者も、頭の中のレキシコンにある、複合語を 1 つの単語らしく発音するための規則が共通しているということになります。¹³

複合語をつかさどる頭の中のレキシコンに関して、日本語母語話者と英語母語話者との間に次のような共通点があることが確認できました。

- (9) a. 新しい複合語を創造し理解する仕組みを持っている
b. 複合語は基本的に主要部末端型である
c. 複合語を 1 つの単語らしく発音するため「強・弱（または高・低）」のイントネーションパターンを持つ¹⁴

12 窪菌・太田（1998）、Ladefoged and Johnson（2014）を参照。

13 違いもあります。英語の複合語では、後半要素は全体的に「弱く」発音されるのが通例ですが、日本語の複合語では、上記の例で見たように後半要素の最初の音節は「高く」発音されそこから急激に「低い」ピッチへと移行します。

14 日本語の複合語のイントネーションパターンに関して、複合語にたまたま共通のイントネーションのパターンがあるだけで、そのようなイントネーションのパターンを支配している「規則」が頭の中にあるわけではない、という反論も考えられるかもしれませんが、つまり、たとえば「海外旅行」というイントネーションは確かに「強・弱」となっているが、それはその複合語を聞いたそのままの発音をただ覚えているだけで、イントネーションの規則が頭の中にあるわけではないという考え方です。これに関しては、白勢・桐谷（2001）が、未知の複合語を用いた実験で、はじめて見た複合語に対しても、無意識のうちに「強・弱」という複合語のイントネーショ

日本語母語話者と英語母語話者の言語能力は、上記の点に関しては共通であると言えるでしょう。¹⁵

3. 発音規則

外国語の発音には多くの人が苦勞すると思われますが、日本語母語話者も英語母語話者も頭の中に共通に持っている発音規則がいくつもあります。以下では、その中でも代表的な例として、「同化現象 assimilation」と「母音弱化・母音脱落 vowel reduction / vowel deletion」を紹介します。

3.1 同化現象

英語の規則動詞の過去形は、-(e)d とつづられますが、以下で見るようにその発音は一樣ではありません。

(10)	a.	robbed	b.	stopped
		begged		kicked
		buzzed		kissed
		[d] (有声音)		[t] (無声音)

(10a) の単語の過去形の形態素は、[d] という有声音 (voiced: 声帯を振動させて出す音) であるのに対して、(10b) では、[t] という無声音 (voiceless: 声帯を振動させずに出す音) となっています。この違いは決してランダムに無秩序に起こっているわけではありません。それぞれの動詞の原形の最後の音に注目してみると、(10a) の単語は [b][d][z] という有声音で終わっています。一方、(10b) の単語は [p][k][s] という無声音で終わっています。つまり、英語の規則過去形形態素がどのように発音されるかは、その単語の原形の最後の音の音韻的な特徴によって決まっているのです。¹⁶

ンパターンで読むということ、つまり複合語として発音する場合は「強・弱」の規則に従っているということ、を論じています。

15 複合語にさらに興味のある人は、基本的な文献として Aronoff (1976), Selkirk (1982) をご参照ください。

16 英語規則動詞の過去形には、第3のパターン (11c) として、skateded や landeded などのように [id] と発音されるものがありますが、ここでは議論を分かりやすくするために、この第3のパターンについての話は脇に置いておくことにします。

(11) 英語規則動詞の過去形形態素は

- a. 動詞原形の最後の音が有声音の時、有声音の [d] として現れる
- b. 動詞原形の最後の音が無声音の時、無声音の [t] として現れる
- (c. 動詞原形の最後の音が [d] または [t] の時、[id] として現れる)

つまり、英語母語話者の頭の中には、以下のような「有声性の同化現象 voicing assimilation」をつかさどる規則があるのです。下記、[+v] は直上の音が有声音であることを、[-v] は直上の音が無声音であることを表しています。

(12) 有声性の同化現象



語の最後の音 X が有声音であれば、過去形形態素の最初の音も有声音である [d] として、X が無声音であれば、過去形形態素の最初の音も無声音の [t] として、発音されるというしっかりとしたパターンが整っているわけです。

では、日本語の場合はどうでしょうか。日本語動詞の過去形形態素も、実は「た」と発音される場合と、「だ」と発音される場合があります。

(13) 日本語の過去形形態素

- | | | | |
|----|---------------------------|----|----------------------------|
| a. | 食べた (tabeta) | b. | 死んだ (shinda) |
| | 見た (mita) | | 読んだ (yonda) |
| | 書いた (kaita) | | 嗅いだ (kaida) |
| | 歩いた (aru ita) | | 騒いだ (sawai da) |
| | [ta] | | [da] |

(13a) の「た」は最初の子音が無声音の [t] で、(13b) の「だ」は最初の子音が有声音の [d] です。ここにはどのようなパターンがあるのでしょうか。たとえば、「死んだ」と「食べた」の動詞の辞書形を比べてみると、それぞれ [shin] と [tabe] になります。すると、最初の一般化の可能性としては、辞書形が有声音子音 (たとえば、[n]) で終わっている場合は、過去形が「だ」と有声音子音 [d] で始まる音になり、それ以外は無声音 [t] で始まる「た」となると考えることができそうです。「読んだ」の場合も、辞書形が [yom] であると考え、このパターンに当てはまります。最後の子音 [m] が有声音なので、過去形形態素も [da] となります。さらに「嗅いだ」や「騒いだ」も、一見すると「だ」の直前に有声音子音がないように見えますが、それぞれの辞書形が

[kag] と [sawag] であると考え、有声音子音 [g] で終わっている単語であると考えられます。したがって、「辞書形の最後の音が有声音である」という条件をそのまま保持することができます。

一方、「書いた」や「歩いた」の辞書形を見ると、それぞれ [kak] と [aruk] ですから、最後の音が [k] でありこれは有声音ではありません。したがって、過去形の発音に関して、次のような規則が日本語母語話者の頭の中にあると考えられます。

(14) 有声性同化規則 (voicing assimilation)

日本語の過去形形態素「た [ta]」は、辞書形が有声音で終わっている単語につく場合に限って、有声音 [d] で始まる「だ [da]」として具現される

上記 (13) の例は、以下のようにまとめることができます。[+v] は有声音、[-v] は無声音であることを示しています。

(15)	辞書形	→ [有声性同化規則] →	発音される形
a.	shin ta [+v] [-v]	shin da [+v] [+v]	shinda
b.	yom ta [+v] [-v]	yom da [+v] [+v]	yonda ([m] → [n] という規則も適用) ¹⁷
c.	kag ta [+v] [-v]	kag da [+v] [+v]	kaida ([g] → [i] という規則も適用)
			
d.	tabe ta	-----	tabeta
e.	aruk ta [-v] [-v]	-----	aruita ([k] → [i] という規則も適用)

過去形形態素も辞書形は無声音 [t] で始まる「た」であると仮定します。すると (15a) では動詞「死ぬ」の辞書形最後の音 [n] (有声音) と過去形形態素の最初の音 [t] とが隣り合うことになります。ここで、(14) の有声性同化規則が適用して、[ta] が [da] になり、最終的に [shinda] という形で発音されます。(15b) の [yom] + [ta] の場合も同様です。(15c) も同じように、辞書形の有声音 [g] に [t] が同化して有声音 [d] となり、まず、[kagda] となります。ここで、日本語は CVCV を基本とする開音節

17 ここで適用されている [m] から [n] への変化も同化現象の一種です。[t] が硬口蓋音 (舌先を上歯茎につけて発音する音) なので、その直前に現れている両唇鼻音 [m] が [t] の調音点と同化して、硬口蓋鼻音 [n] に変化しています。

言語であるので（「ん」に続く場合を除いて）、子音の連続を嫌うという性質があります。[kagda] では [-dg-] という子音連続があるので、それを解消するために [g] を [i] に変える規則が適用されて、最終的に [kaida] という形で具現されています。¹⁸ 一方、(15d) の [tabeta] は、過去形形態素 [ta] の直前の音が有声子音ではなく、母音の [e] です。したがって、規則 (14) の適用条件を満たしていないので、規則は適用されず、なんの音韻変化も起こりません。そのままの形で発音されます。(15e) の [aruk] + [ta] の場合も、直前の音が有声子音ではないので、(14) の規則は適用されず、まず [arukta] となります。ここでも [-kt-] という子音の連続が嫌われ、[k] を [i] に変える規則が適用され、結果として [aruita] という形で具現されることになります。¹⁹

日本語の場合は、有声性同化現象の他にもいくつかの音韻変化プロセスが伴っているため、現象のパターンがやや見えづらくなっている部分もありますが、その基本には「た」の最初の無声子音 [t] が、直前の有声子音に同化して有声子音 [d] に変化しているという現象が存在します。しがたって、日本語の「た」が「だ」と発音されるパターンも、有声性同化現象に従っており、英語の過去形形態素が [d] と発音される場合に見られるものと同じ現象がここでも観察できるのです。

3.2 母音弱化と母音脱落

次に音韻現象の2つ目の例として、「母音弱化」と「母音脱落」という現象を考えてみることにします。英語では、強勢の置かれない母音が、「弱化母音 [ə]」（あいまい母音、あるいはシュワと呼ばれることもあります）として発音される現象があります。たとえば、Canada [kænədə] は最初の母音に主強勢があり、強く [æ] と発音されますが、Canadian [kənɛɪdiən] になると主強勢が2つ目の母音 [ei] に置かれ、最初の母音は弱化され [ə] となり、非常に弱く発音されます。同じように、camera の2つ目の母音、suppose の最初の母音、go to school の to の母音はみな、通常強勢が置かれることはなく、弱化母音 [ə] となっています。

(16) シュワ [ə] として具現される英語弱化母音の例

Canadian	camera	suppose	go to school
[kənɛɪdiən]	[kæməɾə]	[səpouz]	[gou tə skul]

さらに、このような弱化母音は、インフォーマルな日常会話などでは、しばしば脱落して発音されなくなります。これを母音脱落現象と呼びます。

18 この [g] が [i] へ変化する現象は「軟口蓋音弱化 velar softening」と呼ばれます。(15c) の例では、有声性同化規則 (14) の適用後に適用されるように順序付けられています。

19 ここでの [k] から [i] への変化も (15c) の場合と同じ軟口蓋音弱化規則によるものです。

(17) 弱化母音が完全に脱落する例

Canadian	camera	suppose	go to school
[k neidiən]	[kæm rə]	[s pouz]	[gou t skul]
↓	↓	↓	↓
ə	ə	ə	ə

すなわち、音韻的に弱化された母音が、カジュアルな発話において完全に発音されなくなるという現象が起こっているわけです。²⁰

それでは、日本語の場合はどうでしょうか。日本語には英語弱化母音のような「あいまい母音」[ə]は通常ありませんが、標準日本語・東京方言には興味深いある種の母音弱化現象が見られます。母音は通常有声音（声帯を振動させて出す音）ですが、「い」と「う」という高舌母音が、無声音子音にはさまれた環境に現れると無声化されます。たとえば、「北 [kita]」という単語は、標準日本語では [k] と [t] にはさまれた高舌母音 [i] が無声化されて（声帯を振動させずに）発音されます。同様に、「草 [kusa]」という単語は、無声音子音 [k] と [s] にはさまれた高舌母音 [u] が無声化されて発音されます。^{21, 22}

(18) 辞書形

実際の発音

北 [kita]	→	[k _{i̥} ta]	([i̥] は無声化された [i])
草 [kusa]	→	[k _{u̥} sa]	([u̥] は無声化された [u])
菊池くん [kikuchikun]	→	[k _{i̥} k _{u̥} ch _{i̥} kun]	
洗濯機 [sentakuki]	→	[sentak _{u̥} ki]	
水族館 [suizokukan]	→	[suizok _{u̥} kan]	

さて、もし英語と日本語が音韻論的に同じ原理に従っているとすれば、日本語の弱化された母音も、カジュアルな発話において、脱落すると予測されます。実際に、そのような母音脱落が観察されます。「洗濯機・せんたくき」の「く」の母音 [u] は標準日本語では、無声化された弱化母音となっていますが、多くの人が日常会話では、この母音 [u] を完全に脱落させて、「せんたっき [sentakki]」と発音しています。同じことが、「水族館・すいぞくかん [suizokkan]」など多数の例で確認することができます。

20 たとえば、小説中の会話文などで、実際の発音に近い形で、s'pose と書かれることもあります。

21 高舌母音が無声化される現象は、モキル語 (Mokilese、南太平洋オーストロネシア語族の1つ) にも見られます (O'Grady, et al. 2005, p.102)。日本語だけに特有の現象ではありません。

22 この種の母音弱化は、たとえば、関西弁には通常起こらないと考えられています。

(19) 弱化された母音が完全に脱落する場合がある

辞書形 丁寧な実際の発音 カジュアルな実際の発音

洗濯機 [sentakuki] → [sentakuki] → [sentakki]

水族館 [suizokukan] → [suizokukan] → [suizokkan]

以上から、日本語母語話者と英語母語話者の頭の中にある言語音を操る仕組みには、次のような共通点があることが分かりました。

- (20) a. 有声性同化現象をつかさどる仕組みを持っている
 b. 音韻的に弱化された母音を削除する仕組みを持っている

この点でも日本語母語話者と英語母語話者は、頭の中に同じ仕組みを共有しているといえるでしょう。²³

4. 統語

4.1 文を組み立てる仕組み：転位現象

人間が持っている文や句を組み立てる仕組みは、一般に「統語能力」あるいは「統語(論)」と呼ばれますが、以下のような興味深い特性を持っています。まずは、英語母語話者の頭の中を見てみましょう。

(21) John ate miso ramen in the coop cafeteria.

(21) では、miso ramen が ate の直接目的語（食べられたもの）であり、in the coop cafeteria がその出来事が起こった場所であると解釈されます。これらの要素は、このようなタイプの文における最も自然な位置に現れていると考えることができます（最も自然な語順・無標の語順）。ところが、これらの要素は、次の (22) に見られるように、(21) の場合とは異なる位置で発音されることも可能です。

- (22) a. It is **miso ramen** that John ate __ in the coop cafeteria.
 b. It is **in the coop cafeteria** that John ate miso ramen __.

(22a) で miso ramen は (21) と同様、ate の直接目的語として解釈されますが、下線で示された本来の直接目的語の位置とはだいぶ離れた位置に現れています。

23 人間言語の音韻現象にさらに興味のある人は、たとえば、以下の文献を参照してください。

Chomsky and Halle (1968), Kenstowicz (1994), 窪園 (2006), Ladefoged and Johnson (2014)

(22b) でも in the coop cafeteria は、(21) と同じように John が味噌ラーメンを食べた場所を明示する機能を果たしていますが、下線部で示された本来の位置とは別の位置で発音されています。つまり、(22) のこれらの句はある種の意味解釈を受ける基本的な位置と実際に発音される位置とが乖離しているわけです。このような現象を「転位 displacement」と呼びますが、英語母語話者が持つ言語能力の 1 つにこうした転位を可能にする仕組みがあるということになります。では、日本語母語話者の場合はどうでしょうか。次の例を考えてみましょう。

(23) 先生が職員室で学生を三人しかった

(23) で「三人」という単語は「学生」の数を指定していると解釈されます。「先生」の数を指定しているという解釈は大変難しいでしょう。つまりこの文は、「学生」の人数を明確に示し、「先生」の人数については何も述べていない文であると解釈されます。これは、この文では「三人」と「学生」との距離が、「三人」と「先生」との距離よりも近いから、と考えることができるかもしれません。ところが、次の (24) では大変興味深い現象が見られます。

(24) 学生を 先生が職員室で __ 三人しかった

(24) では「三人」は「学生」よりも「先生」に近くなっています。それにもかかわらず、(24) は (23) の時と同じように、「三人」は「学生」を修飾しており、「先生」を修飾しているわけではないと解釈されます。つまり、(24) の「学生(を)」は、(23) の時と同じように、あたかも「三人」の隣の下線部位置にあるかのような解釈を受けているわけです。句が文中で実際に発音されている位置とは異なる位置である種の意味解釈を受けているという点で、日本語の (24) も統語的な転位現象を含んでいると考えることができます。日本語でも英語でもこのような転位現象はたくさん確認することができます。したがって、日本語母語話者の頭の中の文法も英語母語話者の頭の中の文法もこのような転位現象を可能にする仕組みを持っているという点で、共通であるということができます。

4.2 文を組み立てる仕組み：情報提示の方法

日本語の母語話者であれば、小学校に上がる年になれば（あるいはもっと前から）助詞の「～は」と「～が」の使い分けをきちんと理解しているようです。ところが、日本語を学習中の留学生に、「バスが来た」と「バスは来た」の違いは何かと聞かれると、正確に説明するのはとても難しいと思います。母語の言語知識を無意識のうちに自動的に使っているということと、それを意識的に理解し、客観的に説明することとは、ずいぶん違うことであると考えられます。同様に、日本人英語学習者にとって、定冠

詞 the の使い方（いつ使い、いつ使わないのか、いつ a を使うのかなど）は、正確に理解するのはとても大変なことです。英語の母語話者はみな無意識のうちにきちんと使っているようです。日本語助詞の「～は」や「～が」も、英語の冠詞 the（あるいはそれを使わないこと）も、文を組み立てていく上でとても重要な働きをしている文法語彙ですが、この節では両者に共通の意味機能があることを紹介したいと思います。

まずは英語の例 (25) を見てみましょう。(25a) では、student には the は付いていません。Student は数えられる名詞でここでは単数形なので、不定冠詞の a が付いています。そして、通常のイントネーションで発話された場合、(25a) は文全体が「新情報」を表していると解釈されます。つまり、「学生が 1 人 CALL 教室にいた」という事実を、新情報として文全体で表しているわけです。一方、(25b) では student に the が付いています。ここでは、主語の the student が既知の情報（旧情報：話者と聞き手とでどの学生のことを指しているのかが分かっている）であり、それに対して述語の部分で新しい情報を加えるという情報構造になっています。

(25) a. There was a student in the CALL room / A student was in the CALL room.

文全体が新情報

文全体が新情報

b. The student was working on her assignment.

既知情報

新情報

(25a) のような意味情報を担う文を「単純判断」の文と呼び、(25b) のような意味情報を担う文を「総合判断」の文と呼びます。

(26) a. 単純判断 (thetic judgment): 文全体がその状況・出来事を新情報として記述する

b. 総合判断 (categorical judgment): 特定の主題（通常は主語）があり、述語部分はその主題について叙述する

英語では、その文が単純判断か総合判断かを区別する際に、主語名詞句に定冠詞 the があるかないかが大きな役割を果たしているわけです。では日本語ではどうでしょうか。

(26) a. 学生が一人 CALL 教室にいました (単純判断)

文全体が新情報

b. 学生は宿題をやっていました (総合判断)

既知情報

新情報

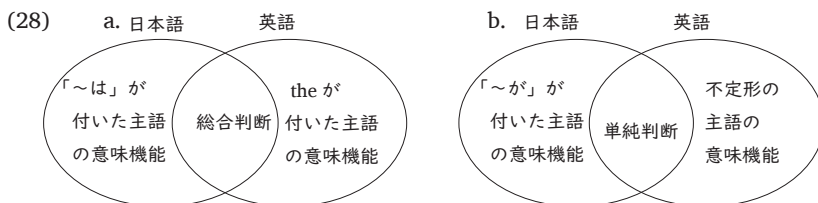
(26a) では文全体を新情報として提示しているのに対して、(26b) では話者と聞き手の間で既知であるトピック「学生」に関して、述語部分で叙述している文になっています。(26a) と (26b) の主語の重要な違いは、前者が「～が」でマークされているのに対して、後者が「～は」でマークされているということです。つまり、日本語では、「～が」でマークされた主語は単純判断の文と相性が良く、「～は」でマークされた主語は総合判断の文と相性が良い、ということになります。

さらに、英語の there 構文はある命題を単純判断として表すことに特化された構文であると考えることができそうです。したがって、there 構文の主語は通常不定形の名詞句が要求され、the がついているような定名詞句主語とは大変相性が悪いことが知られています。²⁴

- (27) a. There was a student in the room.
 b. ??There was the student in the room.

(27b) が大変不自然な文になるのは、全体として単純判断を表そうとする there 構文の性質と、総合判断を表す文に用いられる定冠詞 the が付いた主語名詞句の性質とが、矛盾を起こしているからだと考えられます。

もちろんここで、日本語の助詞「～は」と英語の定冠詞 the の意味機能が完全に同じだといっているわけではありません。「～は」には上記で述べた以外にもさまざまな意味機能がありますし、定冠詞の the にも上記以外のさまざまな意味機能があります。ここでの主張は、両者には主語名詞句を総合判断の文と相性がよい形にするという、意味機能上の重要な共通点があるということです。同様に、日本語の助詞「～が」が付いた主語と英語の不定形の主語とには、単純判断の文と相性がよいという共通の意味機能があるということです。図にまとめると以下ようになります。



以上、日本語母語話者と英語母語話者の持つ統語能力の一部を見てきました。両者とも、文中の要素が発音される位置とある種の解釈を受ける位置とが乖離している「転

24 これは there 構文が持つ「定性効果 definiteness effect」と呼ばれています (Milsark 1977)。

位」という現象を許すという点で共通の仕組みを持っているといえます。また、両者とも文という形式を用いてある命題を表現する際に、「単純判断」として命題を表現する文法上の仕組みと、「総合判断」として命題を表現する仕組みを持っている、という点で同じであるといえるのです。²⁵

5. 言語的意味と語用論

5.1 目にみえない要素の解釈

人間言語には、余剰性や不必要な繰り返しを避けるために、なんらかの省略現象がみられます。そして、省略されているものをどのように意味解釈するのかということに関しては大変洗練された仕組みを持っています。まずは、以下の英語の動詞句削除 (VP-ellipsis) の例を見てみましょう。

- (29) Bill will wash his bike, and John will [e], too.²⁶ (“his = Bill” とする)
a. [e] = wash Bill’s bike (厳密同一解釈)
b. [e] = wash John’s bike (ゆるい同一解釈)

(29) の文で、John が何をするのかということに関して、形の上では、[e] の部分は wash his bike が復元されますが、この his の解釈に関して、2通りの可能性があります。1つは his = Bill’s という「厳密同一解釈」(29a)で、John も Bill の自転車を洗う(のを手伝う)という意味になります。つまりこの解釈のもとでは、自転車はビルの自転車 1 台だけが出てくる状況を表すことになります。ところが(29)の文にはもう1つ his = John’s という「ゆるい同一解釈」(29b)も可能です。John が洗うのは John 自身の自転車ということになり、この解釈では自転車は Bill が洗う Bill の自転車と John が洗う John の自転車の2台の自転車が出てくる状況を表すことになります。²⁷

では、日本語の場合はどうでしょうか。日本語では、文脈から明らかな場合、主語や目的語が発音されない(省略される)という現象が古くから知られています。²⁸ 興

25 英語と日本語の転位現象に関してさらに詳しく知りたい人は、Chomsky (1977), Miyagawa (2005) を参照してください。また、「単純判断」「総合判断」に関しては、Kuroda (1972, 1980) を、日本語の「～は」と「～が」の様々な機能に関しては、野田 (1996) を参照してください。

26 ここで [e] は、発音されないが意味解釈を与えられる要素がそこにあることを示しています。

27 このように英語の動詞句削除が2種類の解釈を持ちうる可能性は、1970年代から明らかになっており (Sag 1976 や Williams 1977 など)、頭の中の意味表示がそれぞれどのようになっているのかということに関する分析は、それ以降今日までさまざまな提案がなされてきています。

28 Kuroda (1965) など。

味深いことに、このような発音されない主語や目的語にも、英語の動詞句削除と同じ解釈上の特性が見られます。²⁹ 次の例を考えてみましょう。

(30) ケンが 自分の自転車を 洗っていたので ジョンも [e] 洗った

- a. [e] = ケンの自転車 (厳密同一解釈)
- b. [e] = ジョンの自転車 (ゆるい同一解釈)

(30) の文では、ジョンが洗ったのが「ケンの自転車」であるという厳密同一解釈 (30a) と、「ジョン自身の自転車」であるというゆるい同一解釈 (30b) の両方の解釈が潜在的に可能です。つまり、日本語母語話者も英語母語話者も、文の省略された部分に解釈を与える際に、「厳密同一解釈」を与える仕組みと「ゆるい同一解釈」を与える仕組みの両方を頭の中の言語能力として共有していると考えることが出来るわけです。では、意味解釈能力の具体例の最後として、主語や目的語に量化詞がついている文の解釈について考えてみましょう。

5.2 量化詞の相互作用

今、教室にいる学生の総数を 5 人と仮定して、次の文を見てください。

- (31) a. Every student read two books last week.
b. どの学生も先週本を 2 冊読んだ

この文が成り立つ状況として、学生が読んだ本の数は最大で何冊となるでしょうか。また、最小は何冊となるでしょうか。学生数は今 5 人であると仮定していますから、英語の (31a) でも日本語の (31b) でも、本の数は最大で (32) に示すように 10 冊となり、最小の場合は (33) で示すように 2 冊となります。

(32) 5 人の学生が読んだ本が全て別々の本である場合。本は全部で $5 \times 2 = 10$ 冊

(33) 5 人の学生全員が同じ 2 冊の本を読んだ場合。本は全部で 2 冊

英語の every, some, most あるいは one, two などの数詞、不定冠詞の a は量化詞と呼ばれます。日本語の「どの～も」や「ほとんどの～」あるいは「1 人、1 つ、2 人、2 つ」なども量化詞の一種です。そして、1 つの文の中に 2 つ（以上）の量化詞が含まれている場合、量化詞同士の作用域の相互関係によって、2 つ（以上）の解釈が可

29 日本語でこの現象を最初に分析したのは、Otani and Whitman (1991) です。また、この現象をゼロ代名詞でもなく、動詞句削除でもなく、項削除であるとする分析を Oku (1998) が提案しています。

能になるという、大変興味深い現象が起こることが古くから知られています。³⁰ たとえば、上記 (31) の文で、もし量化詞 two が量化詞 every を自分の作用域に含めると、その関係は (34) のように示すことができます。

(34) 存在読み

$\exists y, y = \text{two books}, \forall x, x = \text{a student such that } x \text{ read } y. \text{ (two} > \text{every)}$
'There are two books such that all the students read the two books'

これは「2冊の本が存在し、その2冊をすべての学生が読んだ」という意味解釈を表しています。つまり、この解釈を採用した場合、本が全部で2冊という状況を記述していることになります。

一方、(31) の文で量化詞 every が量化詞 two を自分の作用域に含めると、その関係は (35) のような意味表示となります。

(35) 分配読み

$\forall x, x = \text{a student}, \exists y, y = \text{two books such that } x \text{ read } y. \text{ (every} > \text{two)}$
'For all x, x a student, there are two books such that they read them'

これは「どの学生をとっても、その学生が読んだ本が2冊ある」という意味解釈を表しています。つまり、この解釈を採用した場合、5人の学生が読んだ本が全て別々である状況（結果として、本の総数は10冊になる状況）を記述することができるわけです。³¹ したがって、日本語母語話者も英語母語話者も量化詞の相互作用から異なる意味解釈を表示し理解する仕組みを頭の中に持っていることになるわけです。

5.3 量化詞の相互作用と世界に関する知識：意味論と語用論の接点³²

さて、上記 (31) の例文のように、every や「どの～も」のような普遍量化詞 (universal quantifier) が、some/a のような存在量化詞 (existential quantifier) や two/2冊のような数詞よりも文中で先に現れてくる場合は、(34) のような「逆作用域 (inverse scope)」の解釈も、(35) のような「順行作用域 (surface order scope)」の解釈も、文脈さえ整えばどちらも比較的容易に得ることができると考えられています。ところが、次の (36) に見られるように、存在量化詞や数詞が文中で普遍量化詞

30 May (1985) を参照。

31 5人がそれぞれ2冊の本を読んだ、という状況であっても、そのうちの何冊かはたまたま同じ本であったという可能性はあります。(35) はそのような状況の可能性も含めた意味表示です。

32 この節の議論は、英語に関しては Reinhart (2006) に、日本語に関しては奥 (2010) と Oku (2012) に、もとづいています。

よりも先に現れている文では、順行作用域の解釈 (37a) は簡単に得られるのに対して、(37b) のような逆作用域の解釈は大変難しいことが知られています。³³

- (36) a. A TA locked every CALL room.
b. TA が 1 人、どの CALL 教室にもカギをかけた
- (37) a. $\exists x, x = \text{TA}, \forall y, y = \text{CALL room such that } x \text{ locked } y.$ (順行作用域解釈)
(特定の TA が 1 人で、全ての CALL 教室のカギをかけた)
- b. $??\forall y, y = \text{CALL room}, \exists x, x = \text{TA such that } x \text{ locked } y.$ (?? 逆作用域解釈)
(どの CALL 教室に関しても、そこにカギをかけた TA が 1 人いる)

統語構造にもとづいて、頭の中で意味構造を導き出すわけですが、この関係ができるだけ直接的で簡潔であるべきであるという考え方があります (「透明性の仮説 transparency thesis」)。(36) の文構造から、順行作用域 (37a) の意味表示への派生は、2 つの量化詞の相対的な位置関係に変更を加えることがないので、透明性の仮説に合致した派生であるということが出来ます。それに対して、(37b) の意味表示では、2 つの量化詞の相対的な位置関係が、もとの文 (36) の統語構造とは逆になっています。つまり、(36) の文から (37b) の意味表示を派生するには、実際に発音される語順とは異なる構造を頭の中でつくらなければならないわけですから、ひと手間余分なコスト (量化詞の相対的な位置を入れ替えるという操作) がかかっているということになります。(36) の文を見た時に、(37a) の意味解釈の方が (37b) の意味解釈よりもはるかに得やすいのは、(37b) の意味表示を得るには派生の過程で (37a) には必要がない余分なコストがかかっているからと説明することが出来ます。日本語母語話者も英語母語話者も、1 つの文の中に存在量化詞・普遍量化詞という順序で量化詞が出てくる場合、統語構造と意味表示との関係に関して、順行作用域解釈がより得やすく、逆作用域解釈が得づらいという、同じ仕組みを共有していると考えられることができます。

- (38) 日本語も英語も、統語上の語順が「存在量化詞 > 普遍量化詞」である場合、順行作用域解釈が強く好まれる

最後に、我々が持っている「世界に対する認識」と意味構造の関係について、大変興味深い事例をひとつ考えてみます。上記 (36) の例では、(38) のような一般化が可能であることをいま見ましたが、同じように「存在量化詞 > 普遍量化詞」という語順になっている (39) の例を考えてみましょう。

33 Reinhart (1976, p. 193) は、このような場合の逆作用域解釈は基本的に不可能であると論じています。ただし、以下で見るように、Reinhart はこの見解を後に撤回しています。

- (39) a. A TA is watching and waiting in every CALL room.
 b. TA が 1 人、どの CALL 教室にも待機しています

非常に面白いことに、(39) は日本語の場合も英語の場合も、語順通りの順行作用域解釈 (40a) は大変難しいのに対して、逆作用域解釈 (40b) は大変自然になっています。

- (40) a. $?? \exists x, x = \text{TA}, \forall y, y = \text{CALL room such that } x \text{ is watching and waiting in } y.$
 (?? 順行作用域解釈)
 (特定の TA が 1 人いて、その TA が全ての CALL room に待機している)
 b. $\forall y, y = \text{CALL room}, \exists x, x = \text{TA such that } x \text{ is watching and waiting in } y.$
 (逆作用域解釈)
 (どの CALL room にも, TA がそれぞれ 1 人待機している)

いったいなぜ、(39) の文に対しては、意味表示を派生する際に余分なコストがかかっていないはずの順行作用域解釈 (40a) が難しく、頭の中で語順を入れ替えるというコストをかけた (40b) の解釈の方が得やすくなっているのでしょうか。この事実に対する Reinhart (2006) の提案は以下の通りです。(39) の文に対して、余分なコストをかけずに意味表示が得られる順行作用域解釈は、その命題内容がわれわれが持つ世界に対する知識に照らして、非現実的で常識的には考えづらい状況を表していることになります。すなわち、常識的に 1 人の特定の TA が複数の教室に同時に待機するという状況は考えにくいということです。もし、この文に唯一このような解釈の可能性しかないのであれば、そのように解釈されます。つまりこの文は現実的にはありえない状況を述べている文とみなされるわけです。ところが、(36) の文には、意味表示を派生する際にひと手間コストをかけて、2 つの量化詞の相対的位置を入れ替えてやれば、頭の中では (37b) の意味表示を得ることができます。そして、この意味表示は、われわれの世界に対する知識に照らして、現実的にありうる自然な状況を述べています。それぞれの教室に、(別々の) TA が 1 人ずつ待機している、という状況です。そこで、われわれ人間は、(38) で述べたように、通常は 1 つの文に対して、余分なコストをかけずに得られる意味表示で (発語する時と同じ語順の意味構造で) 解釈をすることを好みますが、(i) そのような解釈が現実世界の状況としては不自然であり、かつ (ii) コストをかけて得られる方の意味表示が現実世界の状況としては自然である場合に限り、余分なコストをかけたほうの意味表示を採用する、という認知的なメカニズムが働いていると考えることができる、と Reinhart (2006) は論じています。Reinhart は英語母語話者の持つ仕組みに関する議論ですが、日本語母語話者も全く同じ仕組みを持っているということを奥 (2010) や Oku (2012) は論じています。

以上、言語表現をどのように解釈するのかという仕組みについて、意味論と語用論の両方の面を見てきました。

- (41) 日本語母語話者も英語母語話者も、実際には発音されない文中の要素に対して「厳密同一解釈」を与える仕組みと、「ゆるい同一解釈」を与える仕組みを持っている
- (42) 日本語母語話者も英語母語話者も、文中に2つ（以上）の量化詞がある場合、量化詞の相互作用によって、異なる解釈を与える仕組みを持っている。
- 語順が「普遍量化詞 > 存在量化詞 / 数詞」の場合、順行作用域解釈も逆作用域解釈も得やすい
 - 語順が「存在量化詞 > 普遍量化詞」の場合、順行作用域解釈の方が逆作用域解釈よりも得やすい。（ただし、後者の解釈の方が前者よりも、世界の常識に照らして自然である場合、後者が好まれる場合もある）

人間言語以外にも世界には情報伝達のシステムはたくさん存在します。人工的なものではコンピュータのプログラムを走らせる「言語」がありますし、自然界にはさまざまな動物が、個体間のあるいは集団間の情報伝達の仕組みを持っています。しかし、たとえば上記(41)や(42)のような特性を持った情報伝達システムは、人間の脳内の言語システム以外には存在しないのではないかと考えられます。³⁴

6. おわりに — 生物言語学の視点

「言語」の研究は古くから行われてきています。そして、20世紀の半ばまでは、その社会的な側面や文化的な側面が、言語研究の興味を中心であることが多かったように思います（現在でも、一般の人のイメージはそうかもしれません）。このような場合、研究対象となっている「言語」は本稿でいう「E言語」、つまり表に出てきた観察可能な言語現象（の総体）のことである場合がほとんどではないかと思います。しかし、20世紀の半ばから始まった新しい言語学は、研究の対象に「I言語」という新しい側面をくわえました。つまり、表面的に観察可能な言語現象を可能にしている、人間の頭の中の仕組みを明らかにしようとする研究が行われるようになったわけです。そして、I言語の視点から見ると、日本語母語話者も英語母語話者もその頭の中の仕組みは、その多くの側面において、同一の原理や規則によって律されていることが分かってきたのです。本稿で紹介した具体例でいえば、複合語を新たに生み出したり理解する仕組み、言語音を操る仕組み、文を組み立てる仕組み、意味を理解する仕組みなど、多くの点で共通の原理や規則がその背後にあることを見てきました。このことは、言語

34 削除現象にさらに興味のある人は、Oku (1998, 2008), Saito (2007), Takahashi (2008)などを参照してください。

の多様性に関する伝統的な観点からすると驚くべきことかもしれません。しかし一方で、人間が地域や文化あるいは人種などに関わらず、生物としての遺伝的特質はほぼ同じであることを考えると、個々の人間の脳内認知機能の一部として存在している言語能力が、地域や文化を超えて本質的な部分で同質であるということは、しごく当然のこととみなすこともできるでしょう。本稿では、日本語母語話者と英語母語話者の言語システムの比較という形で議論を進めてきましたが、過去 60 年近くの「I 言語」研究の積み重ねから、多数の人間言語にはその背後に人類共通の仕組みがあることが分かってきています。

最後に、人間の言語、つまり頭の中の言葉を操る仕組みは、根本的なレベルでは同じであるという結論には、どのような意味があるかを少し考えてみたいと思います。まず第一に、人間の脳内にある言葉を操る仕組みの本質的な部分は同質であるとする、今度は逆に、表面的な違いや多様性がなぜ生まれてくるのか、そしてなぜそのような違いや多様性が維持され続けるのかということが問うべき課題として浮き上がってきます。³⁵ 生物学的に共通な部分を深く明らかにすることによってはじめて、違いや多様性の本質にかかわる部分が見えてくるのではないかと思います。

次に、外国語学習あるいは外国語教育の観点から考えて見ましょう。「はじめに」でも少し触れたように、目標学習言語と母語との違いを理解し克服していくことが、外国語学習の非常に重要な部分であると思われます。そしてここでも、「違い」の本質をきちんと理解するための大前提として、どこがどのように「同じ」であるのかということの正確な理解が欠かせないと思われます。表面的な些細な違いを必要以上に難しいものであると感じるのは得策ではないでしょう。また、重要な違いを見逃したり過小評価するのもよい学習者になるための妨げになってしまうかもしれません。

さて、このようなタイプの言語学について学生に講義をすると、ときどき「結局、それが分かってなんの役に立つのですか？」という質問を受けることがあります。日常的な意味での「実用性」には乏しい基礎研究はたくさんあります。そして、物事の本質をより深く、より正しく理解してゆくことは、人間にとってとても重要なことであると考えます。無知は、いらぬ偏見や差別を生むもとにもなりえます。

人間の言語能力の本質的な部分は、全ての人類に生物学的に共通であるということ、そして人間言語と同じようなシステムはこの地球上に（もしかすると全宇宙でも）他にはないということが分かってくると、人類という種は非常にかけがえのない存在であるように思えてきます。自分自身もそのような貴重な存在の 1 人であり、隣の人も、地球の裏側の人もみな 1 人ひとりかけがえのない存在であるという認識を与えてくれる 1 つの方法であるとすれば、このようなタイプの言語学も世の中に対して十分

35 福井 (2012) を参照。

に「役に立つ」重要な意義があるのではないかと考えます。

参考文献

- Aronoff, Mark. 1976. *Word Formation in Generative Grammar*. MIT Press.
- Baker, Mark. 2001. *The Atoms of Language: The Mind's Hidden Rules of Grammar*. Basic Books.
- Chomsky, Noam. 1965. *Aspects of the Theory of Syntax*. MIT Press.
- Chomsky, Noam. 1977. On WH-Movement. In Culicover, P., T. Wasow, and A. Admajian (eds.) *Formal Syntax*. Academic Press, 71–132.
- Chomsky, Noam. 1986. *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*. Praeger.
- Chomsky, Noam. 2007. Biolinguistic Explorations: Design, Development, Evolution. *International Journal of Philosophical Studies* 15(1), 1–21.
- Chomsky, Noam and Morris Halle. 1968. *The Sound Pattern of English*. Harper and Row.
- 福井直樹. 2012. 『新・自然科学としての言語学 生成文法とは何か』(ちくま学芸文庫)
- Kenstowicz, Michael. 1994. *Phonology in Generative Grammar*. Blackwell.
- 窪園晴夫. 2002. 『新語はこうして作られる』(岩波書店)
- 窪園晴夫. 2006. 『アクセントの法則』(岩波書店)
- 窪園晴夫・太田聡. 1998. 『音韻構造とアクセント』(研究社)
- Kuroda, S.-Y. 1965. *Generative Grammatical Studies in the Japanese Language*. Ph.D. Dissertation, MIT.
- Kuroda, S.-Y. 1972. The Categorical and the Thetic judgments: Evidence from Japanese Syntax. *Foundations of Language* 9, 153–185.
- Kuroda, S.-Y. 1980. Bun Kouzou no Hikaku [The Comparison of Sentence Structures]. In Kunihiro, Tetsuya (ed.), *Niti-Eigo Hikaku Kouza 2: Bunpou* [Lectures on Japanese-English Comparative Studies 2: Grammar], 23–61. Tokyo: Taisyukan.
- Ladefoged, Peter and Keith Johnson. 2014. *A Course in Phonetics*, 7th ed. Cengage Learning.
- May, Robert. 1985. *Logical Form*. MIT Press.
- Milsark, Gary. 1977. Toward an Explanation of Certain Peculiarities of the Existential Construction in English. *Linguistic Analysis* 3, 1–29.
- Miyagawa, Shigeru. 2005. Locality in Syntax and Floated Numeral Quantifiers in Japanese and Korean. *Japanese/Korean Linguistics* 14, 270–282.
- 野田尚史. 1996. 『「は」と「が」』(くろしお出版)

- O'Grady, William, John Archibald, Mark Aronoff, and Janie Rees-Miller. 2005. *Contemporary Linguistics, An Introduction* (5th edition). Bedford/St. Martin's.
- Oku, Satoshi. 1998. LF Copy Analysis of Japanese Null Arguments, *CLS* 34, 299–314.
- Oku, Satoshi. 2008. Minimalism and Information Structure: A Case of Ellipsis in Japanese, *Workshop on Altaic Formal Linguistics* 5, 257–269.
- 奥 聡 . 2010. 統語、情報構造、一般認知能力、長谷川信子 (編) 『統語論の新展開と日本語研究 命題を超えて』 開拓社, 227–267.
- Oku, Satoshi. 2012. Interpretive Economy: A Note on Markedness and Computation, *Formal Approach to Japanese Linguistics* 5, 207–216.
- Utani, Kazuyo and John Whitman. 1991. V-raising and VP-ellipsis. *Linguistic Inquiry* 22, 345–358.
- 大津由紀雄 . 2004. 『探検！ことばの世界』 (ひつじ書房)
- Pinker, Steven. 1995. *The Language Instinct*. HarperPerennial.
- Reinhart, Tanya. 1976. *The Syntactic Domain of Anaphora*, Ph.D. Dissertation, MIT.
- Reinhart, Tanya. 2006. *Interface Strategies: Optimal and Costly Computations*. MIT Press.
- Sag, Ivan. 1976. *Deletion and Logical Form*. Ph.D. Dissertation MIT.
- Saito, Mamoru. 2007. Notes on East Asian Argument Ellipsis. *Language Research* 43, 203–227.
- Selkirk, Elizabeth. 1982. *The Syntax of Words*. MIT Press.
- 白勢彩子・桐谷滋 . 2001. 複合名詞アクセント規則の獲得過程 . *Journal of the Phonetic Society of Japan* 5(2), 39–53.
- Takahashi, Daiko. 2008. Noun Phrase Ellipsis. In Shigeru Miyagawa and Mamoru Saito (eds.) *The Oxford Handbook of Japanese Linguistics*, 384–422. Oxford University Press.
- 上田雅信 . 2004. 生成文法の言語観と研究方法 . 中井悟・上田雅信 (編) 『生成文法を学ぶ人のために』 (世界思想社), 3–38,
- Williams, Edwin. 1977. Discourse and Logical Form. *Linguistic Inquiry* 8, 101–139.

